

令和元年6月7日現在

機関番号：33912

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02785

研究課題名（和文）Finiteness-head の特性の解明

研究課題名（英文）An Investigation of Finiteness-head

研究代表者

赤楚 治之（Akaso, Naoyuki）

名古屋学院大学・外国語学部・教授

研究者番号：40212401

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：日英語の文法（統語論）では馴染みの薄い文法範疇である「定性（finiteness）」が、普遍性の観点から日英語においてどのような特性を有するのかについて考察を深めた。定性は時制と綿密な関係を持つために両者を明確に区分することは出来ないが、1990年代後半から欧州で開発されてきた談話と文法を結び付ける（カートグラフィー（談話領域））研究を足掛かりに分析を行った結果、英語と日本語のFinの特性の違いは、前者がAgreement（一致）と結びついているのに対し、日本語ではFocus（焦点）と結びついていること、並びに両者に見られる定性主要部の名詞性は同種のものでない可能性があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヨーロッパ言語を対象としたカートグラフィーの研究では、談話領域（CP）と命題領域（TP）の間に定性（Finiteness）主要部が存在すると考えられているが、日本語においてはその役割は明確ではない。今回の研究では、英語の定性は一致（agreement）と結びつくのに対し、日本語のそれは焦点（focus）に結びついている可能性が高いこと、並びに英語（やヨーロッパ言語）の Fin-head が担う名詞性は、一致を基盤としたものであり、日本語に見られる Fin-head の名詞性はそれとは異なることがわかった。

研究成果の概要（英文）：The project explored what properties finiteness (=Fin) has in English and Japanese, in terms of a viewpoint of universality (UG). Adapting the cartographic approach mainly developed for European languages, we found that the role of Fin in English has to do with agreement, while that in Japanese has to do with focus. In addition, noun properties (noun-hood) of Fin in both languages come from different sources: In English it is related to Agreement, while in Japanese it is related to the noun property of complementizers such as no.

研究分野：英語学

キーワード：定性 Fin-head カートグラフィー Focus

1. 研究開始当初の背景

カートグラフィ (Cartography) 研究では、談話と命題である文を結ぶ連結部 (CP: Complementizer Phrase) を構成する機能範疇群) の一番下に位置するのが定性主要部 (Finiteness-head: 以下、Fin-head) であり、CP と TP (Tense Phrase) のインターフェースとして機能すると考えられてきた。

談話 (文脈、会話、物語など)	連結部 Force Top Foc Fin	文 (命題)
--------------------	---------------------------------	-----------

本プロジェクトの研究対象

その働きは、英語においては、その節が時制をもつ定形節のか、不定詞を伴う非定形節なのかを決める[±finite]に関する情報を担っていると一般的には理解されている。他方、英語とは異なり、日本語においては、定形・不定形の区分があるとしても、Fin-head に具現化されることはない。さらに、興味深いことに、日本語の Fin-head には、名詞的な (nominal) 性質が観察できる。これは Altaic 語族のトルコ語に見られる特性と極めて類似している。(Kornfilt (2007) など。) もし Fin に[+nominal]の名詞的特性を認めるとすれば、動詞的な[±finite]の特性 (素性) との関係はどうか、連結部の上位に位置する主要部 (Force や Foc など) との関係はどうか、などの問題が浮かび上がってくる。しかしながら、これまでの先行研究では、このような Fin-head の特性に取り組んだものは皆無であった。そこで、本研究では、談話と統語論を結ぶ連結部の中の、この未開拓の部分である Fin-head (並びに FinP) が持つ特性を探りたいと考えた。

2. 研究の目的

本プロジェクトの目的は、Fin-head の特性・機能について以下の3つの点について明らかにすることであった。

- (1) Fin-head は verbal-hood (動詞的特性) と nominal-hood (名詞的特性) の特性を持つとすれば、両者の関連性はどのようなものであるのかを明らかにする。
- (2) Fin-head は、単独で取り出せる方法があるのかを明らかにする。
- (3) Fin-head の動詞的素性である[±finiteness]は日英語においてどのようにして具現化されるのかを明らかにする。

3. 研究の方法

- (1) 日本語の Fin-head に出現すると考えられている補文標識の「の」について分析を進める。特に、代名詞「の」と比較することにより、類似点・相違点を明らかにし、両者の関係を調べる。
- (2) Fin とその上位に位置すると考えられる CP 領域の機能範疇との関係性を調べる。
- (3) Fin-head の主要素性である[finiteness]はどこで具現化されるのかについて調べる。

4. 研究成果

Fin-head の持つ finiteness 素性を単独に取り出すことを試みたが、実際のところ単独での取り出しは成功しなかった。英語においては EPP 特性も含め Tense との結びつきが強く、日本語においては、離接する機能範疇（例えば、T-head）との統語的な結びつきを示すことができなかった。これは1の「研究の目的」の(2)を示していることになる。日本語においては、T-head との結びつきが直接的に観察できず、英語以上に単独で取り出すことはできなかったが、Fin-head と Focus-head との関係について理解を深めることができた。その考察を通して、Fin の持つ名詞性に関しては、ヨーロッパ言語と日本語とでは異なる特性からそれが現れることを明らかにできたのではないかと思われる。英語と日本語の Fin の特性の違いは、前者が Agreement（一致）と結びついているのに対し、後者では名詞化の complementizer「の」と結びついていること、そのため、両者に見られる Fin-head の名詞性は同種のものでない可能性があることが指摘できたと思われる。以上、研究の成果をまとめると次の3点になる。

- (1) Fin-head は verbal-hood(動詞的特性)と nominal-hood(名詞的特性)の両方の特性を持ちうるが、Agreement を基盤とする(英語を含む)ヨーロッパ言語の名詞性と Agreement が具現化しない日本語の名詞性とは異なるものである。
- (2) 日英語において、Fin-head を単独で取り出すことは困難で、Fin の機能は、その直近の(上位の主要部である)Focus 主要部との関係のなかでしか「見」えてこない。
- (3) Fin-head の主要素性である[finiteness]は、英語では、Tense 主要部と合体して具現化されるのに対し、日本語の場合、動詞的特性としての(統語的な)機能が希薄であり、その分、名詞的な特性が Fin-head に現れることになる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 2件)

Akaso, Naoyuki. “Review of External Arguments in Transitivity Alternations: A Layering Approach” *English Linguistics* 32 - 5 査読有 2019年 pp. 338-350

赤楚治之 「Finiteness と Fin 主要部の名詞性を巡って」『主流』80号 査読有 2018年 pp. 25-54

[学会発表](計 9件)

Akaso, Naoyuki, Acceptability Judgments & Subject Positions in Japanese Q-float, Workshop on Acceptability Judgments in Current Linguistic Theory, 2018年.

Akaso, Naoyuki, Japanese Quantifier-float and grammaticality judgments, XXXIèmes Journées de Linguistique d'Asie Orientale, 2018年

Akaso, Naoyuki, Phases as the spell-out domain and Japanese Q-float, Current Issues in Comparative Syntax: Past, Present, and Future (National University of Singapore), 2018年

Akaso, Naoyuki, Case without -feature agreement: Nominative case in Japanese, The

47th Poznan Linguistic Meeting, 2017 年

赤楚治之 「Focus-head & Nominative case in Japanese」北海道理論言語学研究会 2017 年

赤楚治之 「生成文法の魅力」同志社ことばの会 2017 年

Akaso, Naoyuki (with Haraguchi Tomoko), On Nominative in Japanese: Focus as a case-licenser, 9th Days of Swiss Linguistics, 2016 年

Akaso, Naoyuki (with Sugawa Seichi), On Japanese sluicing: Evidence for the focus movement and deletion with some notes on English and Polish, Linguistics Beyond and Within, 2016 年

Akaso, Naoyuki, Focus-head as a Case-licenser: Japanese Nominative Case, Workshop in General Linguistics 13 UW-Madison Linguistics Student Organization, 2016 年

〔図書〕(計 1 件)

Akaso, Naoyuki (with Sugawa, Seichi) Chapter 1 “On Japanese Sluicing: Evidence for the Focus Movement & Deletion with some remarks on English and Polish,” pp. 1-31. *Studies in Formal Linguistics: Universal Patterns and Language Specific Parameters* (Sounds-Meaning-Communication Volume 6) (2018) Peter Lang, p253.

〔その他〕

ホームページ https://www.ngu-kenkyu-db.jp/V02010_choord.php?PARAM=4BE6280

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。